No.1284

猫の腹腔内腫瘤

鳥取大学

【動物】猫、雑種、雌、約3ヶ月齢

【臨床症状】ふらつき、飲水後の嘔吐を主訴に来院。腹部触診にて硬結感を有する腫瘤を触知、X線画像検査にて腹腔内に径7cmの腫瘤を確認。血液検査では軽度の脱水以外に著変なし。腫瘤ならびに卵巣・子宮が外科的切除された。

【肉眼所見】腫瘤は左子宮角の近傍に位置しており、間膜を介して子宮と結合していた。腫瘤割面は充実性であり、白色領域と黄褐色領域が分葉状に混在していた。

【組織所見】腫瘤は小型の腫瘍細胞の増殖によって構成されており、厚い線維性組織により小葉状に区画される。腫瘍細胞は円形～多角形の核を有し、細胞質は好酸性でやや豊富、ときおり線維状を呈す。これら腫瘍細胞は索状、ストラップ状、小集塊状に配置しており、核の連鎖、多核細胞を認める。また断片化した核や核濃縮像が散在。PTAH 染色で横紋構造は認めず。免疫染色では腫瘍細胞はビメンチン、デスミン、ミオグロビンに陽性、MyoD1 並びにミオゲニンは腫瘍細胞の細胞質に陽性となった。

【診断】若齢猫の子宮間膜に発生した未分化軟部組織肉腫

【考察】形態並びに免疫染色態度より横紋筋肉腫を疑ったが、MyoD1・ミオゲニン（いずれも筋分化に関わる転写因子）は通常、核内に陽性像が認められるが、本症例は細胞質のみが陽性となったことから上記診断名とした。討議では、ヒトや犬で報告されているMyoD1・ミオゲニンの染色態度は様々でありその解釈は慎重にすべきであること、横紋筋肉腫の診断には電子顕微鏡による検索が重要であること、等が指摘された。また、本症例は非常に若齢での発生であった点、術後7ヶ月以上予後良好に経過している点も特徴に挙げられた。（寸田祐嗣）

【参考文献】

1. Morrotti RA *et al*. An immunohistochemical algorithm to facilitate diagnosis and subtyping of rhabdomyosarcoma: the Children's Oncology Group experience. Am J Surg Pathol.2006 Aug 30(8):962-968.
2. Tuohy JL *et al*. Evaluation of Myogenin and MyoD1 as immune-histochemical markers of canine rhabdomyosarcoma. Vet pathol.2021 May 58(3):516-526.